

2010年9月1日発行

市史だより

F u k u o k a

11

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring/Summer 2010

TAKE FREE



特集

「港、今昔」

西公園～長浜

連載コラム「歴史万華鏡」／連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

編集／発行

福岡市博物館
市史編さん室



二〇〇八年十二月、大昔の地震痕跡の調査が進められていた「浜の町公園」で、とある意外な発見がありました。地下七・五メートルからヒトの生活の痕跡が見つかったのです。貝殻、木の実、植物の種、縄文土器……。なんと、浜の町公園の下に眠っていたのは縄文時代の「貝塚」でした（浜の町貝塚）。貝塚の発見により、かつてこの辺りが海にほど近い陸地、「浜」だったことがわかりました。

今回は西公園〜長浜の海沿いの特集します。浜の時代を出発点として、いつも目にするミナトの風景がどのように出来ていったのか、時代を追って探ってみましょう。

荒津の時代

天平八（七三六）年の遣新羅使は筑紫館（鴻臚館）に滞在し、現在の西公園付近を眺めながら歌を詠みました。彼らがその辺りを「荒津の崎」と呼んだことから、現在ビルが建ち並ぶ明治通りの北側には、荒津と呼ばれる港があったことが推測されます。近年の発掘調査でも、筑紫館の

北館と呼ばれている建物の北側には砂浜と海が広がっていたことが確認されました。

貞観十一（八六九）年五月の夜、この荒津に新羅の海賊船二艘がやって来て、停泊していた豊前国の貢調船から綿絹を略奪し逃げてしまいました（当時の真綿は貿易の代価にもなる貴重品。調は古代の税目のひとつ）。本来は、大宰府管内の諸国がみな揃って京に向け出発するべきだったようですが、なぜかこの時は豊前国だけが先に出航することになり、そこを襲われたようです。政府は「まるで虎の口に餌をのせるようなものだ」と大宰府を叱責しました。大宰府は沿岸警備の見直しを迫られ、政府はこのために左近衛少将坂上滝守を大宰少弐として赴任させました。その結果、警備兵に俘囚（東北から移住させた蝦夷。当時勇敢と評された）が採用されたり、鴻臚館に甲冑が配備されたりしています。鴻臚館跡からはよろいの部品と思われる小さな金属板（小札）が出土しており、この時の措置

との関わりが指摘されています。

古代のこの地域は外交使節や商人の船が行き交う華やかな場でした。しかしそれゆえに、防衛上は大変緊張した顔も持っていたといえるでしょう。

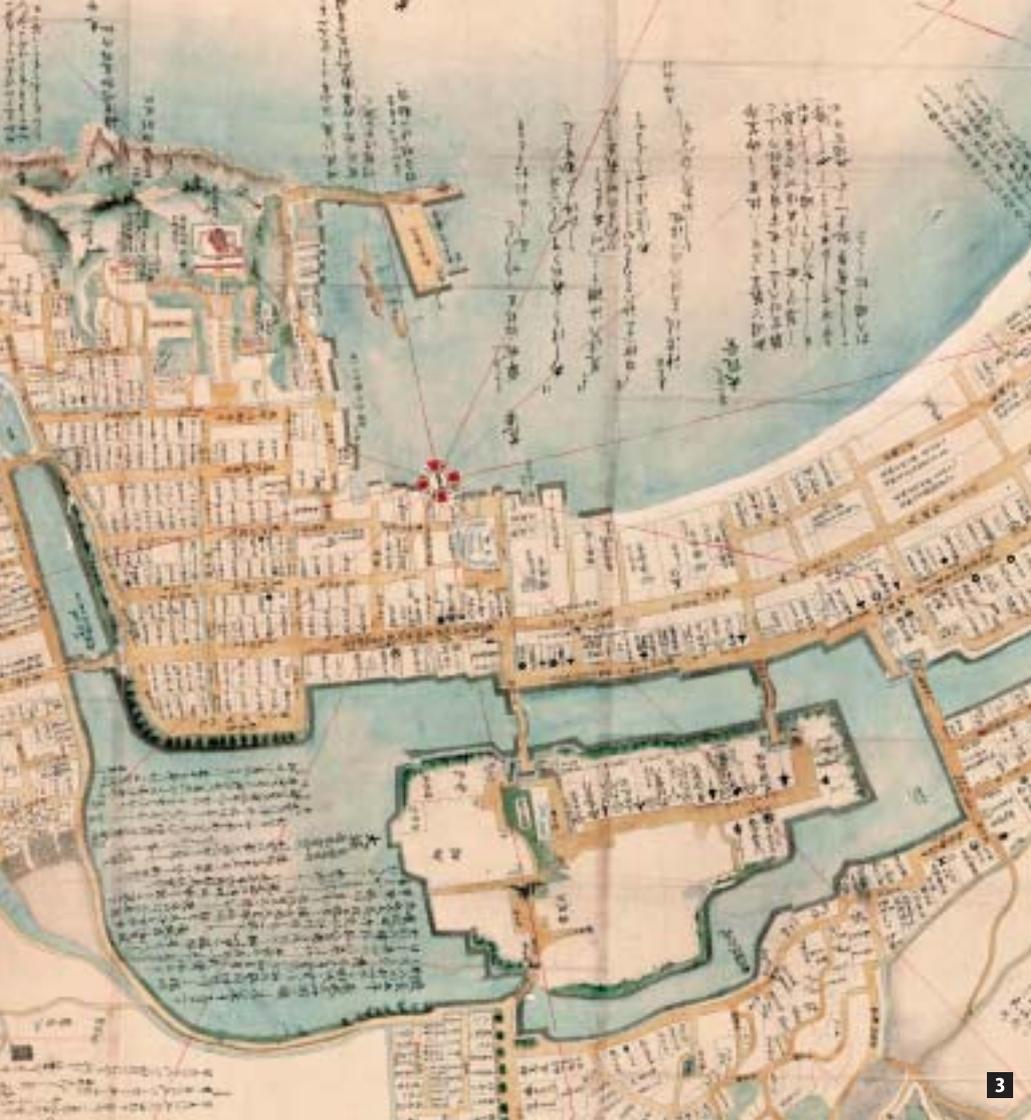
鎌倉時代後期に成立したとされる『蒙古襲来絵詞』は、赤坂付近の様子を「あかさかはむまのあしたちわろく候」（赤坂は馬の移動も困難である）と記しています（第一段詞書）。鴻臚館があった台地がここで低地に落ち込むことを考え合わせれば、赤坂付近は馬の足場の悪い砂地や湿地帯で、北側にはやはり海が広がっていたとみられます。つまり中世の景観も古代とそう大きくは変わらなかつたようです。

この地域に関する中世史料は皆無といえるほど乏しいのですが、それは鴻臚館の衰退以降あまり発展を遂げず、現在の大博通り一帯に発展した国際都市博多にヒト・モノが集まっていった結果だと思われまます。

交通アクセス

- 1 西公園 【西鉄バス】「荒戸二丁目」停留所下車、徒歩5分。
- 2 かもめ広場 【西鉄バス】「港銀座通り」停留所下車、徒歩5分。
- 3 浜の町公園 【西鉄バス】「港一丁目」停留所下車。
- 4 福岡市中央卸売市場（鮮魚会館）
【西鉄バス】・「長浜二丁目」停留所下車、徒歩1分。
・福岡シティーバス「ぐりーん」長浜ルート
「長浜ラーメン街・鮮魚会館入口」停留所下車。
- 5 博多ふ頭（ベイサイドプレイス）
【西鉄バス】「博多埠頭ベイサイドプレイス」停留所下車。





1 現在の浜の町公園前 2 地下7.5m地層の付近(白樺)で貝殻が見られる 3 福岡城下町・博多・近隣古図より
(九州大学附属図書館付設記録資料館 九州文化史資料部門所蔵)

築城を契機として

関ヶ原の戦功により、筑前国を与えられた黒田長政は、まず名島城に入り居城としましたが、城下が狭かったため、新たな城の候補地に福岡(現在の中央区城内)の地を選びました。

慶長六(一六〇一)年から福岡城の建設が始まります。それに伴い城の周辺も整備が行われました。特に城の北側は大規模に整備され、中世までの景観とは大きく変わりました。

この地域には大身家臣の屋敷をはじめ、「六丁筋」と呼ばれ商家で賑わった簀子町・大工町・本町・呉服町・西名島町・東名島町、さらにその北側にもいくつかの町が置かれました。また荒戸山(現在の西公園)の下にはこれまであった入江を埋め立てて、中・上級の家臣が住む荒戸新町が設けられました。江戸時代に描かれた絵図では、荒戸山の東に鉤形の波戸を持つ港が確認できます。三代藩主黒田光之の時に建造が始められたものです。光之が藩主となった頃、オランダや中国との貿易はすでに、幕府によって長崎に限定され、それまで博多にやって来ていた貿易船も来なくなっていました。博多湾岸に

時代によって表情を変えたウォーターフロント。

「港、今昔」西公園～長

特集



船の繫留(けいりゅう)できる港が失われ、寂(さび)れていた状況は、『筑前国統風土記』に「近代袖の港あせてうつもれしより、客船をつなくへき湊(みなと)なくして、風波(かぜなみ)のなやみ多く、旅人のわつらひすくなからず」と記されています。

これを憂(うれ)えた光之は幕府の許命(もと)を受け、工事に着工、寛文元(二六六一)年に堤防(つたい)を完成させ、その東端には燈籠堂(とうろうどう)を建てて役人(やくにん)を置き、港へ出入りする船の安全(あんぜん)を守りました。

寛政十二(一八〇〇)年になると、さらに南東へ波戸(なみとう)を築く工事がなされ、絵図(えず)に見えるような鉤形(かぎがた)となりました。その二年後には港の守護(しゆご)として現在(いま)でもその場所に鎮座(ちんざ)する住吉神社(すみよしじんじ)も勸請(かんによう)されました。『加瀬家記録』には、夏越祭(なごしまり)の様子(ようす)が記され、遊船(ゆうせん)が出て大變賑(おほいそ)わったとあります。

この港は「此国及諸州より来り集れる客船共、常に大小七八十艘、或百数十艘つなきとめ」るほど活況(かっけい)を呈し、「福岡博多のにきはひも亦弥増(いやす)」ことになりました(『筑前国統風土記』)。

このような形で発展をとげた港ではあ

りますが、その目的を商業に限っていたわけではなく、長崎警備(けいび)や藩主(はんしゆ)の長崎巡見(ながさきめぐり)のための船も発着(はつしやく)していました。

「港町」の原風景

近代になると城下町(じやうげしたまち)は寂(さび)れ、市街(いちがい)の中心(ちゆうしん)は博多(はくた)に移り、港灣(みなと)拠点(きょてん)も博多側(はくたがわ)へと移(うつ)っていきました。

福岡船溜(ふくおかふねどまり)にとって転機(てんき)となったのは、昭和九(一九三四)年に行われた漁港(りしやう)の整備(せいび)でした。すでに博多灣(はくたわん)の港灣(みなと)改修(かいしゆ)工事を進(すす)めていた福岡市(ふくおかし)は、長崎(ながさき)県(けん)五島(ごとう)を中心(ちゆうしん)に活動(かっどう)していた徳島(とくしま)県(けん)の漁船(りしやう)団(だん)が新たな根拠(こんきょ)地(ち)として福岡(ふくおか)を候補(こうぼ)に掲(たか)げたことを受け、福岡船溜(ふくおかふねどまり)の改修(かいしゆ)工事を進(すす)めたのです。漁船(りしやう)団(だん)が福岡(ふくおか)に基地(きち)を定めると、港(みなと)周囲(まわり)の埋(う)め立て(たて)地(ち)には各種(かくしゆ)の港灣(みなと)施設(しせつ)、燃料(りやう)基地(きち)、造船(ぞうせん)所(じよ)、水産(すいさん)会社(かいし)の事務所(じむしょ)、住宅(たくわ)などが建(た)ち並(なら)び、漁業(りしやう)基地(きち)として繁(さか)栄(えい)するようになりま

す。戦時(せんじ)中は、漁船(りしやう)の供出(きゆうしゆ)などで一時的(いちじき)に衰退(すいせい)しました。しかし、戦後(せんご)ふたたび漁業(りしやう)基地(きち)としての活況(かっけい)を取り戻(もど)すと、港(みなと)から大手門(おほてもん)にかけて商店街(しょうてんがい)が形成(けいせい)され、当

ひとくちコラム

北進する神様



- 昭和2年測量時
- 昭和41年測量時
- 現在

西公園(さいこうえん)から東(ひがし)に二キロほど進むと、博多(はくた)ポータータワー(ポーター)が目(め)印(いん)の博多(はくた)ふ頭(ふか)が見(み)えてきます。その北端(きたたん)に、小さな社(やしろ)があるのをご存(ぞん)じでしょうか。この社は「櫛田(しん)神社(じんじ)浜宮(はまみや)」といい、毎年(まいねん)六月(じゅうごく)には博多(はくた)祇園(ぎげん)山笠(やまがさ)の「棒洗(ぼうせん)い」が行(い)われています。山笠(やまがさ)の土台(つちだい)となる六本(むっぺん)の舁(こ)ぎ棒(ぼう)を海水(かいすい)で洗(せん)い清(きよ)める行事(ぎぎ)で、これが終(お)わらないと山笠(やまがさ)を組み立(くみだ)てることはできません。さて、博多(はくた)ふ頭の北端(きたたん)は、昭和(しやうわ)四十年(しじゅうねん)代末(だいまつ)に埋(う)め立て(たて)が完了(げんり)した部分(ぶぶん)です。では浜宮(はまみや)は、以前(いぜん)はどこにあってたのでしょか？昭和(しやうわ)四十年(しじゅうねん)代半(だいはん)の地図(ちず)を見ると、社(やしろ)は今(いま)よりも一〇〇メートルほど南東(なんとう)にあり、当時(たうじ)はそこが海(うみ)際(ぎ)だったようです。しかし、この一帯(いちたい)も、昭和(しやうわ)二十年(にじゅうねん)代後半(だいこうはん)に埋(う)め立て(たて)によってできた場所(ばしょ)です。そこで昭和(しやうわ)初期(しき)の地図(ちず)を見てみると、さらに三〇〇メートルほど南(なん)、同じ(おな)く当時(たうじ)の海(うみ)際に社(やしろ)が描(えが)かれていました。つまり浜宮(はまみや)は、埋(う)め立て(たて)によって遠(とほ)ざかる海岸線(かいがんせん)を追(お)いかけ、数百(ひゃく)メートルを数度(すうど)に分(わ)けて北進(きたしん)したようなのです。海水(かいすい)が山笠(やまがさ)行事(ぎぎ)に欠(か)かせないため、浜宮(はまみや)は海(うみ)際に鎮座(ちんざ)する必要(ひつよう)があったのでしょ。博多(はくた)港(みなと)の西側(せいがわ)と同様(どうよう)、東側(とうがわ)も埋(う)め立て(たて)と港灣(みなと)整備(せいび)によって刻々(こくこく)と姿(すがた)を変(か)えていきました。そのめまぐるしい変化(へんげん)の一端(いちたん)が、浜宮(はまみや)の遷移(せんい)にも表(あらわ)れているよう



▲ 現在の西公園から見た福岡船溜。かつては海を望む景勝地であったが、埋め立てによってその景色は様変わりした



▲ 絵葉書「福岡百景（西公園より福岡市街を望む）」（福岡市博物館蔵）

時の好景気にも支えられて大きく賑わいました。また長浜の埋め立て地に倉庫が建ち並ぶようになる昭和三十年には、魚市場が長浜に移転し福岡鮮魚市場が建設されました。

昭和後期になると全国的な漁業の退潮もあって漁港としての繁栄は陰りましたが、鮮魚市場ではなお多くの取引が行われ、市民の食を支えています。近年では、福岡食文化の発信地の一つとして取り上げられ、新たな魅力が注目されています。

元寇防塁

元の皇帝フビライはユーラシア大陸の大半を手中におさめ、文永十一（一二七四）年には軍船九〇〇艘、三万の兵を、朝貢を拒否した日本の博多湾へと侵攻させました。元軍は百道浜付近に上陸し、少貳景資ら日本勢と激しい合戦を行い、夜になると船に引き上げました。ところが翌朝になると船影が消えていました。台風が吹いたという説もありますが、命拾いした鎌倉幕府は二度目の来襲に備え、元軍を上陸させないように石築地（防塁）を今津から香椎までの約二〇キロメートルの博多湾岸に半年で築きあげました。弘安四（一二八一）年に再来襲した元軍四万の兵は石築地に阻まれ肥前鷹島まで退き、江南軍の軍船三五〇艘、一〇万の兵と合流して体勢を整え直しましたが、これまた大暴風により壊滅的被害をうけ目的を遂げることができませんでした。その後も鎌倉幕府は三回目の襲来に備え石築地の補修を続行しますが、この石築地は九州大学医学部教授で考古学者の中山平次郎氏により「元寇防塁」と命名され、昭和六一年に国の史跡に指定されました。しかしすでにその多くの石材が福岡城築城に利用されるなど、都市の発達とともに取り壊され、今では今津、生の松原、西新など数力所に残るのみになりました。



■ 史跡元寇防塁（西新・百道地区）

新修 福岡市史 刊行開始

福岡市では、新世紀における本市発展の指針とするため、また貴重な歴史資料の継承を目指して、平成16年度より『新修 福岡市史』を編さんしています。これから平成35年度までに、通史編、資料編、特別編あわせて全35巻を順次刊行していく予定です。

その記念すべき第1回配本として、「資料編 中世1 市内所在文書」「特別編 福の民 暮らしのなかに技がある」の2冊を、9月から一般に販売いたします。



資料編 中世① 市内所在文書

A5判 上製本 1,350頁 頒価 5,000円

福岡市内にある資料収蔵機関・寺社・個人が所蔵する中世史料を、一卷にまとめて紹介する初の史料集。『花押・印章集』と『聖福寺古図』を付す。



特別編 福の民 暮らしのなかに技がある

A4判 330頁 頒価 1,800円

暮らしのなかでわたしたちは無意識にいろいろな「技」を使っている。暮らしの技にまつわる話を、福岡のひとびとの写真と聞き書きで描きだす群像絵巻。

販売所

◎福岡市情報プラザ(福岡市役所1階)
福岡市中央区天神1-8-1
TEL 092-733-5333
<http://www.city.fukuoka.lg.jp/shisei/kouhou-hodo/johoplaza/>

◎福岡市博物館ミュージアムショップ
福岡市早良区百道浜3-1-1
TEL 092-823-2800
http://museum.city.fukuoka.jp/jc/jc_fr3_105.html

◎文化芸術情報館アトリエ
(博多リバレイン地下2階)
福岡市博多区下川端町3-1
TEL 092-281-0081
<http://www.ffac.or.jp/artlier/>

お問い合わせ

◎福岡市博物館 市史編さん室
福岡市早良区百道浜3-1-1
TEL 092-845-5245

福岡市史刊行記念 講演会のお知らせ

福岡市史編さん室では、市史編さん事業の活動と成果を広く市民の皆さんに知っていただくため、毎年、講演会を開催しています。今年は『新修 福岡市史』の刊行開始を記念して、ふたつの時代のトピックをとりあげます。

ひとつは、東アジア世界と深くつながりながら繁栄していた中世博多の貿易実態を知らしめた画期的発見、新安沖沈没船。もうひとつは、高度経済成長によって私たちの暮らしのしくみが大きく変わる直前、昭和30年前後の福岡を見事に切り取った井上孝治という写真家の目。福岡の歴史にいろいろな角度から光をあてていく『新修 福岡市史』にふさわしい講演会です。

日時 平成22年10月9日(土) 午後1時30分 開演(1時開場)

場所 早良市民センター ホール

▶福岡市早良区百道2-2-1 TEL 092-831-2321
福岡市営地下鉄「藤崎駅」下車すぐ／西鉄バス「藤崎」停留所下車すぐ

◎ 入場無料 ◎ 定員先着500人

〈講師〉 西谷 正氏
(九州歴史資料館館長・九州大学名誉教授)

中世博多の対外交流
——韓国・新安沖発見沈没船をめぐる



■昭和29年、福岡市：新天町(撮影:井上孝治)



■沈没船発見時の状況

〈講師〉 井上 一氏
(写真家・ブルックスタジオ代表)
思い出の街、福岡
——井上孝治が撮った昭和

考古

土器をじっくり観察すると、土器が焼かれる前に粘土に絡め取られた「何か」の痕が見つかることがあります。その型をとって、顕微鏡で見ると、虫や米、豆類など、浮かび上がる姿は、何ともリアル。米につく虫として知られるコクゾウムシは、表面が固いので、残りが良ければ、虫表面の凹凸までが、土器に「記録」されます。

『資料編 考古』では、どの時代の土器に、どのような痕跡があったのか、四箇遺跡や重留遺跡から見つかったものを例に、そのリアルな姿を掲載します。

古代

出土文字資料の釈読が続いています。市内で出土したものを一点一点確認していく地道な作業ですが、現在九〇点あまりの木簡の調査を終えました。

最近調査したものには金武青木A遺跡出土木簡があります。この遺跡は昨年発掘調査され、現地説明会には多くの人が訪れました。木簡は木片に墨で書かれたものであるため、環境の変化によって状態が変わってしまうこともあります。できれば出土から時間をおかずに文字を読み取るのが一番良く、今回はその幸運に恵まれました。木簡には金武青木A遺跡がある早良郡以外の郡名が記されるなど、行政区域を超えた人の移動もうかがわれ、今後この地域の歴史を考える上で欠くことができない資料になると思われます。

中世

今回の『資料編 中世2』は、副題を「市外所在文書」とし、福岡市外に所在する古文書の中から、福岡市域に関係するものを選び出して収録します。刊行は平成二十六年の予定です。現段階では、市外に所在する中世文書の情報をできるだけ多く収集し、収録できるよう、計画を練りつつ作業を進めています。基礎的な情報を作成している途中ですので、概数もまだわかりませんが、石清水八幡宮に所蔵されている筥崎宮関係の文書をはじめとして、充実した内容をお届けできるよう、日々作業を続けています。

近世

来年の刊行に向けて、『資料編 近世1』の校正作業を進めています。

校正は一つ一つの文字の確認・訂正だけではなく、レイアウトにまで作業が及びます。原史料の文字は毛筆で記されているため、中には史料と同じように活字で組むことができない部分もあります。

そのため要領を作成した上で校正を行うわけですが、それぞれの史料で記述方法の相違や、文字の大きさや高さ自体に意味があったりと、統一・整理をするだけでもひと苦労です。これから何回か校正を重ねていくことになりませんが、しばらくは悩ましい日々が続きます。

近現代

近現代専門部会ではこれまで『資料編 近現代1』（平成二十四年刊行）を「政治・行政」分野の資料編として資料調査、収集を行ってきましたが、これまでの調査研究をふまえ、明治前期における福岡・博多の社会を記録した資料群を収録とする方針へ変更しました。

既刊『福岡市史』は市制施行以後（すなわち明治後半）を主な対象としていたので、既刊ではフォローできなかった時代の資料に取り組むことには新修としての意義があるものと考えられます。

なお本誌第一〇号で紹介した筆耕作業のうち、一部は「近現代1」に収録され、他の部分は「近現代2」の編集に回されることとなります。

民俗

民俗専門部会にとっては本編ともいえるべき民俗編に向けて、市内の祭礼・催事の調査を始めました。博多三大祭り（博多どんたく港まつり・博多祇園山笠・筥崎宮放生会）に代表されるような大規模なものから、町の小さな社や堂を近所の家数軒で祭るような小規模なものまで、福博の祭りは街の多様性を表すようにバラエティに富んでいます。可能な範囲で実地調査を行いつつ、街の暮らしにとってこれらの祭礼・催事がどのような意味を持っているのか、今後探っていきたいと考えています。

これまで福岡市史編さん事業の足跡をたどってきました。そこで、福岡市には自治体史がないといってきましたが、少なくとも歴代市長をはじめ幹部の中には、福岡の他都市には類例のない歴史に着目し、市史編さん担当の職員を配置して、独自の自治体史を編さんすることの必要性を感じていた人がいたことは理解できました。そしてそれは自治体の周年記念のたびに思い出され、予算化されて何らかの形にまとめられていたこともわかりました。もちろん福岡市の特異な歴史から見ると、編さん事業の予算額や人員などの規模の問題があり、作成された印刷物の内容も検討しなければならないでしょうが、少なくとも従来いわれてきたように、福岡市が自治体史編さんにまったく興味がなかったわけではないことは、理解していただけるのではないかと思います。しかし、そのような福岡市の体質の中から、現行の「福岡市史」全19巻が、どのようにして刊行されるようになったのか、そのことをこれから見ていきたいと思います。

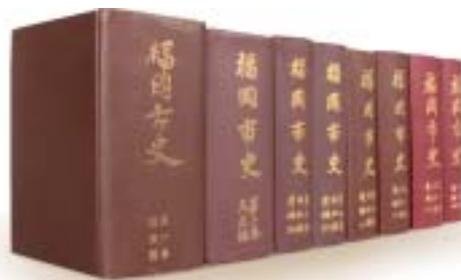
福岡市制施行50年史を編さんした永島芳郎は昭和23年に亡くなり、急速委嘱した次の伊東尾四郎いとうおしろうも昭和24年8月に急逝します。その跡を引き継いだのが小野有耶介おののやすけでした。彼の経歴などはよくわかっていませんが、前任の二人の後を任されるからには、相当の経験があったのではないかと考えられます。昭和25年3月に嘱託に任じられ、3ヵ月後の6月には事務吏員に採用されています。

小野には期するところがあったようで、その仕事ぶりには、従来の編さん体制には見られない点がいくつかあります。まずは「福岡市史編纂に対する構想」の作成です。内容は第8回に詳しく記したので、そちらを参照していただければ幸いです。市史

の具体的な冊数には触れていませんが、原始から現代までを対象とし、市制以後に重点をおいた、内容的にも多岐に渡る大部の自治体史を構想していたようです。そのため年次ごとの編さん事業計画を策定して、具体的なイメージ作りを意図したようです。さらには市政全般の中に編さん事業を位置づけようとして、同年11月30日に「福岡市市史編さん委員会規程」を条文化しました。これによって市史編さん事業は、正式に市の行政の中に位置づけられたといっても過言ではないでしょう。

上記の「編さん委員会」は助役を委員長とし、委員には収入役、総務局、税務局、建築局、教育委員会などの責任者があてられて、市役所横断的な組織を目指していたものです。とりわけ一般学識経験者からの顧問就任が考えられており、考古学なかやまの中山平次郎なかがやま へいじろう、もりていじろう、もりかつみ、ひかりゅうしょう、森貞次郎もりかつみ、国史学ひかりゅうしょうの森克己、干潟龍祥、経済史学みやもとまたしの宮本又次、たけおかかつや、美学の竹岡勝也、福岡県立図書館長きくちみつぐの菊池貢、九大付属図書館長ふるのきよと古野清人の名前があげられ、今日から考えても第一級の豪華な顔ぶれという事ができます。しかし委員には学識経験者は起用されてはおらず、吏員中心で編さんする自治体史の方向性がこの時点で決まっていたのです。

今回は第8回の方と重なったところが多いので、時系列的に読み合わせていただく事をお願いします。



表紙の写真

博多漁港（福岡船溜）【福岡市中央区港】

【写真：穂積香織】

福岡の中心街、天神からほど近い都会のど真ん中に博多漁港はあります。そこは石油中継基地などがある荒津地区と、福岡を東西に走る幹線道路、那の津通りに挟まれます。すぐ裏には高層マンション群、向かいには造船所など工業施設、そしてすぐ横には住宅街という何とも不思議な立地です。漁港の脇には美しく整備された「かもめ広場」があり、日中は穏やかな海を、夜になるとライトアップされた荒津大橋などを眺めることができます。また、一時は衰退していた港地区周辺にも、古い建物を再利用したおしゃれなカフェやバーなどが点在し、かつての港町は今、ゆっくりとした時間が流れるオトナの街として注目されつつあります。